

「赤ベコ」フオワードで全国に挑む

黒沢尻工業高校 ラグビー部監督

高橋 智也 さん

10月25日、県大会を制し16年ぶり24度目の花園出場を決めた黒沢尻エラグビー部。64人の部員の指揮を執るのは高橋智也監督(35歳・和賀町岩崎出身)です。

決勝戦には12年ぶりの出場。「競った試合になったとき経験の差が出なければ」と心配していたものの、リラックスして試合に臨んでいた選手を見て、「メンタルコンディションがうまくいった」と安心しました。ノーサイドの笛が

鳴り、盛岡工に勝利したときは「頭が真っ白で実感が沸かなかった」ながらも、周囲からは「監督が一番喜んで」と指摘されたそうです。

自身も高校時代は黒エラグビー部の主将を務め、3年生のときに初めて花園を経験。入部する前年までは13年連続で花園に出場していた常連校しかし、1、2年生のときは出場を逃し苦杯をなめました。3年時に花園のグラウンドに立ったときは、スタンドの大

きさや会場の雰囲気を感じたそうです。2回戦で強豪の天理高奈良県に敗れたとき、「自分たちの力を発揮できなかった。また花園にきたい」と教師の道を志しました。

日本大学に進学してからも、プロップとして活躍。学生ワールドカップ南アフリカ大会では日本代表として出場しました。卒業後、ラグビーの名門・サントリーに入社。その後、高校教師としてUターン就職し、平成12年から母校で保健体育を教えながら、監督を務めました。4年後、大船渡工高へ異動し、昨年からは再び黒工の監督に就任しました。



部員には「卒業するとき、黒工に入ってラグビーをやっけてよかったと思えるよう努力してほしい。自分たちはそれを手伝うだけ」と語る高橋監督。「赤ベコ」と称される攻撃的なフオワードと高いディフェンス力を誇るバックスで花園に挑みます。

数字に見る北上 ⑩

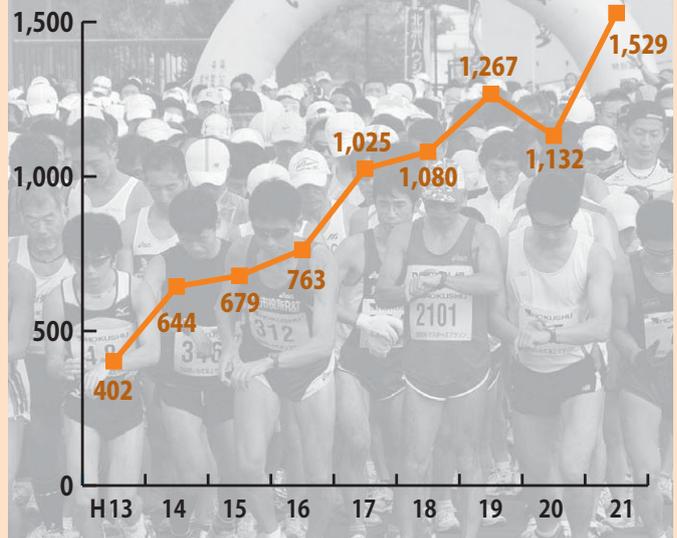
10月11日に開催された「いわて北上マラソン大会」の参加者数です。近年の健康志向とマラソンブームなどが相まって、今年は北海道から沖縄までの29都道府県から過去最高の1,529人(フルマラソンの部933人、10キロの部596人)が参加。市内からも336人がエントリーし、秋の北上路を舞台に健脚を競いました。

市は平成13年に「スポーツ都市宣言」を行い、同年からマラソン大会を開催。今年で9回目を迎えました。コースは県内唯一の日本陸上競技連盟公認コースを使用。県内参加者の上位入賞者は、かけはし交流で縁のある沖縄石垣島マラソン大会に出場することができます。大会記録は男子が2時間29分37秒、女子が3時間4分42秒です。

1,529人



いわて北上マラソン大会の参加者数



きたかみ物産館

北上産の大豆100%使用
きたかみ納豆



2パック(50g×2個)：100円

社会福祉法人方光会 北萩寮

町分2-62-1
☎63-7278

▶▶(44)

戸籍を読み解いて家系図をつくろう

清水 潔

遠野奇談 佐々木 喜善

ママが守る！家庭の新型インフルエンザ対策

高木 香織

母と子のおやすみまえの小さなお話365

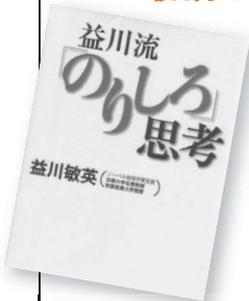
千葉 幹夫

雪だるまの雪子ちゃん 江國 香織

ぐりとぐらのしりとりうた

やまわき ゆりこ絵 なかがわ りえこ作

《11月の新着本から》



『益川流「のりしろ」思考』

益川 敏英 著
扶桑社

ノーベル物理学賞の“型破り”教授が、「のりしろ」の多い人生を熱く語る1冊。「ムダ」に効用あり！



『おじいちゃんのSLアルバム』

佐竹保雄 写真・原案
小風さち 文
福音館書店

一冊のSLのアルバムを通して遠く離れて暮らすおじいちゃんと孫の交流を描きます。



菊池 めぐみ さん

北上産にこだわった味
北上産の大豆だけを使い、さらによい豆だけを1粒1粒手作業で選別。蒸し加減も人の目でチェックするという、すべてが本当の手作り。ほかでは味わえない大豆の風味と柔らかな食感です。
12月1日からタレも北上産にこだわり、名称も「萩」から「きたかみ納豆」として生まれ変わります。今まで以上に安心してお届けします。

庭の秋作業



散歩道
114
北上市長 伊藤 研

紅葉がすぎて木々の枯れ葉が風に舞い、庭の小さい秋も終わりを告げるころ、地元の白ユリや、旅先で買ったユリを植栽した数個のプランターも、ものさびしくなった。今年はおぶりな咲きだった。11月が植え替え時期と聞いて、土とプランターの準備はできていても重い腰はあがらない。そんな折、とぼせ園で栽培された白ユリの球根が届いた。意を決して小春日和の午後、作業に取り掛かる。プランターの中は状態も悪く球根の成長は進んでいなかった。

やっぱりなと思いつつ作業を進める。ひっくり返したプランターの中からナメクジ、ダンゴムシ、得体のしれない幼虫が姿を現す。ユリの棲家が浸食され健康な状態ではなかった。手を抜くと、生き物の世界も環境の変化に対応してしまうのだろう。妙に納得しながら虫たちを排除し続けると、小さな蟬の幼虫が出てきて驚いた。妻は「何年も土の中にいて生まれてくるのでしょうか？ 可哀そう。いい場所に埋め戻してあげよう」。いつか成虫になり飛び立ち、にぎやかな夏の音を聞かせてくれるのだろうか。それにしても蟬は何年で成長するのだろうか。プランターはそんな長い間の放置ではなかったのに。

写真を撮り、観察できるビンに入れ、孫たちの勉強材料にすればよかったかな。掘り出した球根を乾燥させずに植え直し、夏に北海道で求めた、小さい乾燥した黒ユリの球根も植えてみた。芽を出してくれるだろうか。

つるべ落としの秋の風の冷たさを感じ、腰を伸ばす。秋の作業が来年のにおい優しい開花につながってくれたらうれしい。